

## 松陰はどのようにとらえられてきたか

勝 田 政 治

### はじめに

本報告は、吉田松陰像（論）の変遷を日本近現代史（明治期から現在）のなかで概観するものです。松陰は、1859年（安政6）10月27日に国事犯（幕府老中間部詮勝暗殺計画）として処刑されましたが、1862年（文久2）11月28日の幕府大赦令（松陰のみならず安政の大獄犠牲者に対する恩赦）によって復権を果たしました。以後、顕彰活動が可能となります。1863年（文久3）1月に高杉晋作・伊藤博文らが、松陰の遺骸を小塚原回向院（荒川区南千住）から荏原郡若林（世田谷区若林）に改葬し、1882年（明治15）に同地に松陰神社が建立されることとなります。

松陰像に関する先行研究には、田中彰『吉田松陰―変転する人物像』（中公新書、2001年）があります。以下、田中書に依拠して私見を交えながら、田中書刊行後に発表された研究をも含めて述べていきます。また、1945年（昭和20）後の松陰像は報告者（筆者）の問題関心から、日本史学分野の研究成果に限っていることをお断りしておきます。なお、史料引用にあたっては適宜ルビをふって、現代語表記に改めました。

### I 近代日本（大日本帝国の時代）のなかで

#### (1) 明治中期

##### ○革命家として

松陰の最初の伝記としては、1891年（明治24）の野口勝一・富岡政信（ともに旧水戸藩士）共編『吉田松陰伝』（野史台）が挙げられますが、評伝（伝記）というよりは史料集というものです。

本格的な伝記（松陰論）として著されたものが、その2年後の1893年（明治26）の徳富蘇峰『吉田松陰』（民友社）であります（1981〈昭和56〉年に岩波文庫として復刻）。同書は、第15章のタイトルに「革命家としての松陰」とあるように、革命家としての松陰像を打ち出した、古典的な文献としての位置を占めているものです。その第20章「事業と教訓」（末尾）の結論部分には、次のような記述があります。

彼は維新革命の健児なり……彼が殉難者としての血をそそぎしより三十余年、維新の大業半ば荒廃し、さらに第二の維新を要するの時節は迫りぬ。第二の吉田松陰を要する時節は来りぬ。彼の孤墳は、今に既に動きつつあるを見ずや（文庫版 249~250 頁）

松陰は明治維新を実現した革命家であったが、明治維新の「大業」が「荒廃」したことから、松陰の意図を継承して今こそ「第二」の明治維新を達成しなければならない、と述べられています。同書が刊行された明治中期は、自由民権運動（反明治政府運動）を継承した民党（反政府政党の総称）が、明治政府と対立・抗争したいわゆる初期議会の時代でありました。

徳富蘇峰は、20 代の頃から熊本で自由民権運動に携わってきました。そして、明治政府に対する「第二の維新」革命（自由民権運動の目標であった立憲政体の樹立）を志向する平民主義者として、1886 年（明治 19）に『将来之日本』を刊行して言論界にデビューしました。翌年に民友社を創設して、雑誌『国民之友』を発刊しています。そうした蘇峰が 30 歳の時、民党と明治政府が対立していた時代風潮をバックとして、松陰を明治維新の革命家として提示したのであります。最初の本格的な松陰論が登場したのが 1890 年代の明治中期であり、平民主義者徳富蘇峰による鮮烈な革命家像でありました。そこで、松陰は反体制（反政府）のシンボルとしてとらえられたのです。

## (2) 明治後期

### ○国体論者・帝国主義者として

明治中期に革命家とされた松陰は、その後の日清・日露戦争を経た 1900 年代に入って日本の帝国主義化が進められた明治後期、革命家から一転して体制派の国体論者・帝国主義論者としてとらえられることになります。

その先駆けとなったのが、前項で触れた革命家像を提示した徳富蘇峰でありました。蘇峰は 1908 年（明治 41）、前述した 1893 年（初版）の『吉田松陰』に大幅に手を入れて、改定版『吉田松陰』を民友社から刊行しました。改定版は、初版の「革命家としての松陰」という章を削除し、「松陰と国体論」・「松陰と帝国主義」・「松陰と武士道」などを追加しています。蘇峰は初版を絶版とし、この改定版によって新たな松陰像を示すことになりました。以後、改定版が広く読まれ続け、蘇峰の松陰像として定着することになります。

改定版は、「緒論」で「顧みれば明治の時代も、既に四十年を経たり。大和民族が、世界列強と、対等の地歩を占む可き奮闘は、既に其の一段落を告げたり。此れより世界列強の一員として、国際政治に如何なる活動<sup>カ</sup>を為す可き乎」（25 頁）、と日露戦争により日本が「世界列強の一員」となったことを表明しています。そ

して、末尾の「結論」では「日本帝国を本位とし、過去、現在、未来を通して斯<sup>この</sup>くに君臨し給う、我か皇室を中心として、之<sup>これ</sup>に向て国民忠愛の丹誠を統一総合するにあるのみ。松陰先生をして、今日に在らしめば、復た決して斯言<sup>このげん</sup>を易へざる可し」(493頁)、と日本は天皇中心の国家体制であるという国体論を強調し、松陰を国体論者として位置づけています。

よく知られているように蘇峰は、日清戦争後とくに三国干渉によって平民主義者から帝国主義者へと転回していました。政府を支持し大国化を肯定して推進する、蘇峰の立場からの帝国主義者・国体論者松陰像の提示でありました。松陰は、蘇峰により反体制派の革命家から帝国主義国家日本のシンボルとして転換することになりました。ここに、近代日本における松陰像の原形が登場し、以後広く普及することになります。

蘇峰の改定版『吉田松陰』が刊行された一週間後、1908年(明治41)10月17日に帝国教育会(文部大臣を顧問とし、教育関係者による府県教育会の全国組織)が、松陰を顕彰する「松陰没後五十年記念大会」を開催しました。その大会の演説集として、翌1909年(明治42)に帝国教育会編『吉田松陰』が刊行されています。そこに追悼演説が収められている人には、文部大臣の小松原英太郎、学習院長の乃木希典、東京帝国大学教授の井上哲次郎、東京高等師範学校長の嘉納治五郎ら政界・学界・教育界の有名人とともに徳富蘇峰も名を連ねていました。帝国教育会長の辻新次(教育行政家)は、演説集の「序」で次のように述べています。

吉田松陰先生……王室<sup>りやうい</sup>の陵夷<sup>なげ</sup>を慨き、列国<sup>しやうけつ</sup>の猖獗<sup>いまだお</sup>を憤り、遂に自ら海外に航して其形勢を審<sup>つまびらか</sup>にし、以て国威を四表に宣揚するの大策を建んと欲す……先生<sup>せんせい</sup>の志業終始一貫、憂国忠君の事……先生<sup>せんせい</sup>逝きて今や五十<sup>せいそ</sup>の星霜<sup>せいそう</sup>を経……維新<sup>こ</sup>の偉業<sup>たうい</sup>茲に成り、皇室の尊嚴、国家の隆盛、千古比無し(1-2頁)

明治維新こそ帝国主義国家日本を生み出したものにとらえ、松陰を「憂国忠君」の帝国主義国家の功労者として顕彰する必要性を高らかに宣言しています。国体論者・帝国主義者としての松陰像は、徳富蘇峰個人のみではなく、教育者の団体によっても明治後期において唱えられているのです。

### (3) 大正期

#### ○国士として

明治から大正へと改元された1912年から大正時代となります。そして、大正時代を象徴する言葉に「大正デモクラシー」があります。「大正デモクラシー」の時代においては、民間で社会改造をめざす三つの潮流があったことが指摘され

ています。三つの潮流とは、民本主義と社会主義と国家主義（国粹主義）となります（成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書、2007年）。大正期の松陰像もこうした改造の諸潮流のなかで、とくに日本は天皇を中心とする国家であるという国体論に基づく、国家主義（国粹主義）から唱えられてくるようになります。

1915年（大正4）、杉浦重剛・世木鹿吉共著『吉田寅次郎』が刊行されています。同書は「松陰は……武士道的人士也……国土也、浪人也、書生也……猛士なり」（288頁）と述べています。松陰を「国土」（国事に尽くす人）として打ち出しています。杉浦重剛は、日本の伝統や文化的独自性を尊重する立場から、国家主義（国粹主義）を説いた教育家・思想家であります。こうした国家主義的改造の潮流から、「国土」松陰像が唱えられてきました。もっとも「国土」像は、すでに明治末期に登場していたものです。松陰の松下村塾生であった野村靖は、1908年（明治41）の雑誌『日本及日本人』（495号）で、「吉田松陰先生は真に国家の士、即ち日本国の国土」であると述べています。そして、翌年の帝国教育会『吉田松陰』（前掲）で嘉納治五郎も、松陰を「尊王の精神に富み……国土であり……自己の志を遂げる」人物であると評価していました。

松陰「国土」像は、本学（国土館大学）の創設と深く関わってきます。国土館大学の母体となった団体に青年大民団があります。その大民団が1917年（大正6）、「宣言 我党の本領」を発表しています。そこには、次のように宣言されています。

五尺の貧相な小男が破屋に子弟を集めて教化を垂れた結果が維新の革命を捲起した。之が吉田松陰の国家を背負って立つべき形式であった……我党は……国家を背負って立つべき精神の発露……日本国の骨髓たらん事を期するものである（『国土館百年史 史料編上』、19頁）

そして、同年の「国土館設立趣旨」は次のように述べています。

吾人は……国家の柱石たる真智識を養成せん事を期す……膝を交えて親しく活学を講ずるの道場を開設せん……大正維新の松陰塾たる（同前、85頁）

翌1918年には、青年大民団が第一回国土祭を開催し、松陰と橋本佐内を「国土」として両名の慰霊祭を行なっています。その「国土祭予告」には、「国土の精神……尽忠にして奉公の大精神なり。蓋し国家は、之を以て興り之を失って亡ぶ」（同前、114頁）、と記されていました。

国土館大学の校名「国土」は、大正期において国家主義（国粹主義）による社会改造をめざす運動のなかで、松陰「国土」像が唱えられたという時代風潮のなかで登場したものでした。

#### (4) 昭和戦前・中期

##### ○「忠君愛国」教育者として

大正時代には、民本主義・社会主義・国家主義（国粹主義）という三つの潮流が併存していました。しかしながら、昭和に入り 1931 年（昭和 6）に満州事変がおこり、日本が戦争への道を歩み出すとともに、挙国一致的風潮のなかで戦時体制が急速に作りあげられ、日中戦争からアジア・太平洋戦争へと向かうことになります。こうした戦争の時代における松陰像を見ていきましょう。

この時期の松陰像に大きな影響を与えたのが、国定教科書（修身教科書）でありました。

松陰が国定教科書に取り上げられるようになるのは、明治期の 1904 年（明治 37）からですが、本格的に修身教科書に登場するのは満州事変後でありました。

1933 年（昭和 8）の『尋常小学修身書』五の「第二十二 忠君愛国」の項で松陰は、次のように記述されています。少し長くなりますが引用します。

松陰は、少年の頃、父から、我が国がりっぱな国であることを教えられ、又先輩に外国の事情を聞いて、国のために尽くそうと志を立てました……アメリカ合衆国の軍艦が我が国に来て、交際を求め、通商をせまりました……此の国難をすくって国のために尽そうと苦心しました……松陰は、「我国は万世一系の天皇のお治めになる国であって、我等は祖先以来、天皇の臣民である……天皇と臣民とは一体をなし……これが我が国の万国にすぐれたところである」と信じ……忠君愛国の精神を振るい起こさせようと決心しました……真心をこめて弟子たちを教えました……国体を明らかにし、皇室を尊び、我が国を盛んにしようとした其の精神は、弟子たちにうけつがれ……御国ために尽くしました（海後宗臣編『日本教科書体系』近代編三）

天皇中心の国体の優秀性や天皇支配の正当性を強調し、松陰こそがそれを信じて松下村塾で教え込む、「忠君愛国」教育者の典型であるとされています。

さらに、1941 年（昭和 16）の『初等修身』四の「四 父と子」の項は、次のようになっています。父（百合之助）が「ほんとうの日本国民とは、どういうことか」と松陰に尋ねると、松陰は「臣民としての道を守り、命をささげて陛下の御ためにつくすのが、ほんとうの日本国民」であると答えています。「忠君愛国」者としての松陰の言葉が教材とされているのです。

このように昭和期に戦時体制が強化されるなか、国体の尊厳を強調し、臣民教育の強化策として「忠君愛国」の精神を注入する、教育者としての松陰像が強調されるようになりました。

一方、昭和期に入るとようやく実証的な伝記が著されています。1936年（昭和11）の玖村敏雄『吉田松陰』であります。玖村は『吉田松陰全集』（定本版全10巻、1934～36年）編集の中心人物であり、この全集が以後現在までの松陰研究の基礎史料集となっています。玖村が自ら全集に収めた松陰関係史料を、縦横無尽に使って書き上げたのが『吉田松陰』でした。同書の「序」には次のように記されています。「人として教育者としての松陰の面影を浮彫にする……一筋なる求道的精神は憂国の至情と一体なところ皇国の本義に徹せずには措かなかった……思想過程に重きを置き、それと行動、殊に教育者の行動との関連を見失わぬように注意した」。そして、末尾には「愛国的精神、その至純なる教育的精神は、なお未だ悉くは実現して居ないところのその雄大なる国策と共にこれを仰ぐ者の心に永く生きて作用きつづけ、天壤と窮りなき皇運を万古に扶翼し奉るであろう」、と述べられています。

明治後期以来の国体論に加え、国定教科書に見られた「忠君愛国」教育者像の提示であります。玖村『吉田松陰』は実証的な伝記であることから、後の教育者としての松陰像に大きな影響を与えることになりました。

#### ○軍国主義者として

田中彰『吉田松陰』によれば、松陰関係の単著作数は1941～42年（昭和16～17）にピークに達しています。アジア・太平洋戦争が始められた時期であります。そこでは、軍国主義者松陰像が戦争遂行の思想動員として活用されることになります。1942年に刊行された、書名からも分かる典型的な出版物として、池田宜政『殉国の人吉田松陰』・福本義亮『吉田松陰大陸・南進論』・和田健爾『吉田松陰殉国の精神』などが挙げられます。1941年の武田勘治『不滅の人吉田松陰』は、「日本人的感觉を喪失して八紘一字の大理想を体感することも出来ず、皇国日本の進運に石ころの如く邪魔者」となっている人々に対して、「皇国民たるの魂を甦るしめる……薬となるであろう」として、松陰を語っています。さらに、1943年（昭和18）の岡不可止『吉田松陰』は、「突撃体当たりの死につく陸海将兵の絶命留魂の心事も、全く松陰のそれと同じであった。松陰の生涯が日本の真の歴史と伝統の継承顕現であり、今日戦うのは「三千年の歴史」の「祖先の全心血肉とを凝固」した一身であり、「この事実を売却しては断じてならぬことを、特にここに強調」とすると結んでいます。

軍国主義者松陰像は、「児童・生徒や国民のなかへたたき込まれ、「少松陰」としての軍国少年（少女）らを戦争へとかりたてる役割を果たした」と田中彰『吉田松陰』は自らの体験を踏まえて述懐しています。

## Ⅱ 現代日本（日本国の時代）のなかで

### (1) 昭和戦後占領期

#### ○思想的・政治的实践者として

1945年（昭和20）年の敗戦により、日本はアメリカを中心とする連合国により占領されることになりました。非軍事化が進められた占領政策のもとでは、戦時中に盛んに唱えられた軍国主義者松陰像はタブー視され、松陰関係書物は全く刊行されなくなってしまいました。この空白を破って戦後初めて刊行されたのが、1951年（昭和26）の奈良本辰也『吉田松陰』（岩波新書）でありました。同書は、次のように述べています。

一面を捉えて、或は教育者松陰……或は精神主義者松陰……決して真物の松陰でない……松陰の時代に生きた生き方の失敗と真実の中に、了解できる多くのものを見出している……松陰は……人間として、また学者として、時代の真只中にその真価をきたえようとしていたのである。学問が、真実の道を探求するためには、それは書齋の中で、ただ書を読んでいたのでは駄目であることを悟ったのだ。悟ると同時に、彼は実践もしたのであった（「あとがき」166～7頁）

幕末という時代に正面から向き合って格闘したという、実践する学者松陰像がありました。戦後は、日本史家（奈良本辰也）からの実践者としての提示から始まりました。

### (2) 昭和独立以後から現在

#### ○明治維新の思想家（尊王攘夷論者）として

実践者としての提示後、松陰は近代史研究のなかで明治維新を実現した、尊王攘夷論者として再評価されることになります。何人かの日本史家による松陰像を見ていきましょう。

戦後早くから松陰に着目した日本史家に鹿野政直がいます。鹿野は、1956年（昭和31）の『日本近代思想の形成』（新評論社）、1969年（昭和44）の『資本主義形成期の秩序意識』（筑摩書房）で松陰論を発表しており、そのエッセンスを2005年（平成17）の『近代国家を構想した思想家たち』（岩波ジュニア新書）の「吉田松陰」という項目で次のように述べています。

尊王攘夷思想……徳川幕府の倒壊と明治維新の実現へとみちびいていった政治思想……松陰は……その尊王攘夷思想の創始者……尊王という概念に統一

への、攘夷という概念に独立への志向を核としてもち、その意味で新しい秩序への展望をひらいた（23～25 頁）

鹿野は、統一国家の形成と独立の維持をめざす尊王攘夷論者としての松陰像を提示しました。明治維新の課題は何であったのでしょうか。報告者（筆者）は、江戸時代の幕藩体制という分権体制から、天皇中心の中央集権体制による国民的統一国家（国民国家）を創りあげ、当時の言葉である「万国対峙」という、独立を維持して欧米列強と肩を並べる地位を築きあげることにあったと考えています。鹿野は、明治維新の思想家としての松陰像を打ち出しました。同様のとらえかたは、最近の日本史家にも多く見られます。

2010 年（平成 22）の本山幸彦『吉田松陰の思想』（不二出版）は、「尊王攘夷を唱えて全国民のナショナリズムを喚起し、天皇の下に鞏固な国民の統一を実現し、日本の独立と国権拡張を勝ちとろうとした吉田松陰」（5 頁）、と論じています。また、2012 年（平成 24）年の宮地正人『幕末維新変革史 上』（岩波書店）は、第 11 章「吉田松陰の歴史的 position」で次のように述べています。

松陰は……欧米列強の創り出した地球規模の世界の中で対等に伍していく力量をもつ主権国家となることは果たして可能か、との切実な関心事……幕藩制国家のイデオロギー的制約を打破して……強大な外圧に抗しうる主権国家形成には……サムライ階級が国家を下から支え強固にさせる日本民族形成のイニシアチブをとらなければならないという主張に発展していく（14～143、146、157 頁）

#### ○征韓論者（朝鮮侵略論者）として

こうした松陰像に対し、幕末維新期の「固有な侵略思想」としての征韓論の特質を明確にする必要があるという観点から、松陰を征韓論者（朝鮮侵略者）としてとらえる見方もあります。

2002（平成 14）年の吉野誠『明治維新と征韓論—吉田松陰から西郷隆盛へ』（大和書房）の第 1 章「吉田松陰と朝鮮」は、次のように論じています。

松陰の朝鮮に関する発言……外圧への対応として打ち出された近隣アジア地域への侵略策は、国体論・尊王論によって理念化され、さらに富国強兵をふまえた戦略構想に仕上げられていったが、この構想のなかで朝鮮侵略論は一貫して中核的な位置を占めつづけたものといえる……松陰の征韓思想は、尊攘派の発言に継承される（69～70 頁）



近代日本の帝国主義（日本による朝鮮侵略・支配）を批判するという潮流のなか、朝鮮認識を中心として先駆的帝国主義思想家、征韓論者としての松陰像の提示であります。このようなとらえ方に対しては、2012年（平成24）の須田努「明治維新と征韓論の形成」（趙景達編『近代日朝関係史』、有志舎）を紹介しておきましょう。須田は、「松陰の朝鮮侵攻論は……書簡を通じて提起……現状を打開する草莽という主体を創出するために、柔弱で武力におとる朝鮮を攻めろと語った……幕末の段階……彼の学統（弟子たち）に引き継がれることはなかった」（70・72頁）、と述べています。征韓論は変革主体を創出するための手段であり、その主張が松下村塾生に継承されることはなかった、という見解です。

#### ○平等論者として

尊王攘夷論者松陰像は、明治維新时期を対象として唱えられたものですが、近年では維新时期のみならず、松陰をもっと普遍的にとらえようとする見方も提示されています。

これまで本報告が依拠してきました田中彰『吉田松陰』は、次のように主張しています。

被差別の人々の「解放」が広く一般化されなければならない。それはすべての人間を差別なく等身大にみようとする松陰の主張……アイヌの人々を同じ人間としてみている……出身や身分や人種をも超えて、人間を人間としてみようとする目線……人間をあらためて平等にみつめるまなざし（153、155、161頁）

被差別部落民、囚人、アイヌへの松陰の視座に着目して、人間平等論者としての松陰像の提示であります。

#### ○理想的教育者として

松下村塾の研究に初めて本格的に取り組み、多くの業績を発表してきた教育学者に海原徹がいます（1990年の『吉田松陰と松下村塾』、1993年の『松下村塾の人びと』、1999年の『松下村塾の明治維新』）。海原は、2003年（平成15）これまでの研究を基にして『吉田松陰』（ミネルヴァ書房）刊行し、次のように述べています。

松陰は……短い生涯のほとんどを教師の顔で過ごした……松下村塾には初めから、本当の意味での教育の自由、すなわち教える自由と学ぶ自由があった……与えられたカリキュラムなどは一切存在しなかった……上からの規制も

存在しなかった……教える内容や方法など一切を教師が決定できたという意味で、村塾の教師は、限りなく教える自由を享受した…理想の教師、期待される教師像であることは、おそらく間違いない……教育の原風景として位置づけ、そこへ限りなく近づく努力を続けることは、われわれに課せられたほとんど義務といえる（248～251 頁）

すでに触れました昭和戦前・中期に高揚した軍国主義教育者像を批判し、松下村塾を対象としてめざすべき「理想」の教育者としての松陰像の提示であります。

### ○国際化論者として

最も新しい松陰像を提示しているものとして、2014 年（平成 26）の桐原健真『吉田松陰』（ちくま新書）があります（桐原は 2009 年（平成 21）に『吉田松陰の思想と行動』を発表しています）。最後に桐原の松陰像を紹介しておきましょう。同書（『吉田松陰』）は、次のように主張しています

- ・松陰は、諸外国との対等関係の確立を目指す攘夷論（対外論）と、天皇・朝廷を「帝国日本」の「元首」「政府」に位置づける尊王論とを結合させた新たな尊王攘夷論を打ち立てた（169 頁）
- ・松陰は……天皇を戴く「帝国」として諸外国と対等の関係を構築し、その独立を確立することを目指した……松陰にとっての尊王攘夷論とは……世界征服論などとは、全く異質であった……固有性としての「国体」を堅持しつつ、「五大州公共の道」という普遍へと乗り出していく「航海雄略」を唱えたのである。これこそ、彼が最終的にたどり着いた尊王攘夷のかたちであった（229～230 頁）
- ・各々の国に、各々の固有性があることを承認……固有性の独善的な執着は、孤立への道でしかない……固有性を堅持しつつ、外に向かって自己を開いていくことこそが、「宇内の公論」であると松陰は主張……彼における固有性の模索は……今日のわれわれにとっても一つの導き手となる（232～3 頁）

近年の明治維新史研究の成果をとり入れた、新たな尊王攘夷論者松陰像であります。報告者（筆者）は、これをグローバル化する現代において、国際化論者としての松陰像の提示であると理解しています。

### おわりに

近代日本における松陰像は、史料的制約（史料の未整備）のもと、それぞれの時代状況（思潮）のなかで論者の主観（思い入れ）や時には国策（教科書）によっ

て唱えられてきたものでありました。第二次世界大戦後の現代日本において近年の1990年以降、ようやく実証研究を基とする松陰像が語られるようになったのです。今後は、諸学問（歴史学・政治学・哲学・教育学など）からアプローチする、総合的な松陰研究（「松陰学」）に支えられた松陰像を構築しなければならないでしょう。もっとも、唯一絶対の松陰像などをめざすべきではないでしょうが。